117 妊娠の維持に果たす線溶系の役割に関する検討

自治医大, 同血液医学研究部門止血血栓*
渡辺 尚, 玉田太郎, 坂田洋一*

〔目的〕妊娠初期より分娩後に至るまでの線溶系の役割を, 線溶開始段階の制御という側面から検討し, その意義を推察した。

〔方法〕正常妊産褥婦71例(妊娠初期15例, 中期15例, 後期16例, 分娩第1期5例, 児娩出1時間後7例, 6時間後5例, 3日後8例), 非妊健常婦人14例につき, 血中組織型Plasminogen Activator (t-PA) 抗原量とその活性, Plasminogen Activator Inhibitor (PAI)-1抗原量とその活性, t-PA/PAI-1複合体量 (Complex) およびPAI-2抗原量を測定した。対象者すべてに対しこの研究の主旨を説明し, 同意を得た。t-PA, PAI-1, PAI-2の抗原量およびComplexはELISA法, t-PA活性は合成基質法, PAI-1活性は検体にt-PAを加え, 生ずるComplexより計算する方法を用いて測定した。

〔成績〕妊娠経過に伴い, 線溶反応の引き金となるt-PAの抗原量は増加した(妊娠後期は非妊時の約2倍)。しかし, PAI-1抗原量はそれより過剰に増加し(同約8倍), 増加したt-PAのほとんどがこれと複合体を作り活性を失っていた。また, 出血傾向を示す血中PAI-1欠乏症疑いの妊婦が特別な誘因なく妊娠7週で流産に至ったという症例が認められた。

〔結論〕妊娠経過に伴い線溶活性は低下していく傾向にあった。この線溶活性の低下は従来より分娩時の出血に対する防御の意味があるといわれてきたが, この変化は妊娠初期より徐々に認められることから, 妊娠の維持に何らかの関連があるものと思われる。実際, 血中PAI-1欠乏症の疑いのある妊婦が早期に流産に至ったことは, このことを示唆するひとつの事実とも考えられる。

118 習慣流産と抗リン脂質抗体 ーとくに夫リンパ球注入療法後の抗リン脂質抗体陽性化についてー

済生会川内病院
竹迫俊二, 川上明之

〔目的〕習慣流産(習流)に対するリンパ球注入療法(Lc療法)はその高い有効性のためか, やや安易に行われている。しかし, その作用機序および長期的な副作用が十分明らかでない現在, 慎重に対処すべきであろう。一方, 続発性習流では抗リン脂質抗体(APA)陽性率が高いと報告されている。そこで, 原発性習流でもAPAを測定し, またLc療法後のAPA, 抗核抗体も調べ, Lc療法に伴う副作用発現の可能性をみた。〔方法〕原発性習流17例, 続発性習流5例の血清中cardiolipin(CL), phosphatidylglycerol(PG), phosphatidylserine (PS), phosphatidylinositol(PI), phosphatidic acid(PA)に対する抗体(IgGおよびIgM)をELISA法で測定した。健常婦人40名の平均値+3S.D.以上を陽性とした。また, APAおよび他の自己抗体陰性の原発性習流4例に夫Lc療法を施行し, 妊娠許可時のAPA, 抗核抗体の有無をみた。夫Lc療法は, 1回に 3×10^7 個を2週間毎に妊娠前に5~6回, 皮内反応の低下がみられるまで行い, 妊娠後さらに2回追加した。〔成績〕続発性習流5例中4例(80%)の他, 原発性習流17例中5例(29%)で5種類のAPAのうちいずれか1つ以上が陽性であった。夫Lc療法を行った原発性習流4例中3例は妊娠継続に成功し, 1例は流産したが, 胎児の染色体異常が認められた。4例全例に抗PG IgG, 2例に抗PIIgG, 1例に抗CL IgMの陽性化がみられた。1例で抗核抗体の出現が認められた。

〔結論〕①原発性習流でも自己免疫学的異常をもつものがある。②Lc療法により陽性化した自己抗体の意義は現在のところ明らかではないが, 自己免疫疾患の発症や増悪につながる可能性がある。